

孤独死「身近」半数

1人暮らしの高齢者のうち、孤独死を身近に感じている人が49.6%であることが、南日本新聞社と鹿児島国際大学が鹿児島県内4市町で行った合同調査で明らかになった。また31.1%が、災害時の避難の際、手助けが必要と答えた。

「孤独死を身近に感じるか」では「非常に感じる」13.5%、「まあ感じる」36.1%。収入が低いほど「非常に感じる」割合は高くなる傾向があった。

男女別では、女性48.9%に対し、男性は53%だった。

「緊急時1人で避難できるか」では、「大いに人の手助けがいる」8.5%、「少し人の手助けがいる」22.6%。緊急時に望むサービス（複数回答）は、「自分で操作する通報システム」が316人と最も多い一方、

「見守りなどのサービスを受けたいとは思わない」が177人いた。

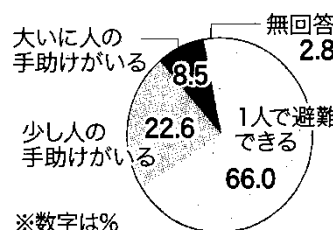
一番近い子どもは「別居だが同一家屋」「同一敷地」「近隣地域にいる」「同一市町村にいる」で46%を占め、子どもと住まいが近い人が半数近かった。

1人暮らしの生活について、女性の46.3%が「満足」と答えたのに対しY男性は33.5%だった。地域のサロンの集まりは男性より女性切参加が多い一方で、男性はボランティア活動への関心が高いことが分かった。

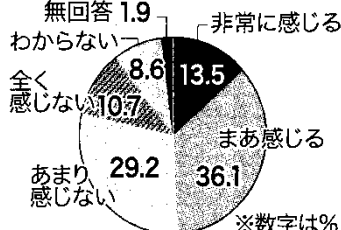
通院している人は83%だった。

鹿児島1人暮らし高齢者

緊急時、1人で避難できますか



孤独死を身近に感じますか



※数字は%

※数字は%

南日本新聞・鹿児島国際大調査

社会的孤立 密接に関係

鹿児島国際大学の高橋信行教授（地域福祉論）の話

「社会的孤立」と「孤独死を身近に感じるか」は密接に関係していた。近所づきあいが「ほとんどない」人のうち75%が孤独死を身近に感じると答えている。

	鹿児島市	南さつま市	南大隅町	喜界町
人口(人)	605,846	38,704	8,815	8,169
高齢化率	21.2%	35.0%	43.3%	32.9%
高齢化率順位	43	11	1	19
65歳以上1人世帯(1人暮らし比率)	27,635 (10.5%)	3,355 (20.5%)	964 (24.2%)	693 (19.1%)

(2010年国勢調査から)

調査方法 1人暮らしの高齢者（65歳以上）を対象に、昨年9、10月実施。高齢化率や人口、地域バランスなどから4市町を対象とした。鹿児島市400人、南さつま市200人、南大隅町200人、喜界町200人に対し、各地の民生委員の協力を得て、戸別にアンケート用紙を配布し、後日995人（男性215人、女性759人、不明21人）から回収した。設問数53、無記名。

2010年発表の国の全国調査では、単身高齢世帯で孤独死を身近に感じているのは64.7%だった。今回は49.6%だったが、厳密な無作為抽出ではなく、民生委員の方をお願いしてアンケート用紙を配っており、データからも近所づきあいをしている割合がほかの調査よりも高かった。この点を考慮してみる必要がある。

サロンの集まりには女性が多く、ボランティア活動への関心は男性が高いことから、女性は親和志向が、男性は達成志向

がそれぞれ強いことが表れている。男性の孤立を防ぐには、社会性を帯びた活動へ誘導していくことが大切だろう。

外出頻度 収入で変化

社会参加 男女に違い

通院している人は8割を超え、望む支援は「ちょっとした家の補修」一。南日本新聞社と鹿児島国際大学が1人暮らしの高齢者を対象に行った合同アンケート調査で、具体的な不安や要望が明らかになった。社会参加をめぐるのは、「茶飲み」的な集まりに女性は積極的に出ていくのに対し、男性は女性ほどではない。一方、集まりがボランティア活動など社会性をもったものになると女性より男性の方が意識が高いなど、男女で社会参加への意識の違いが明らかとなった。外出頻度は収入でも異なっており、関係機関の今後の対応が迫られる。

店の近さ地域で差

生鮮食料品が近くで買えない割合は、南大隅町が最も高い。

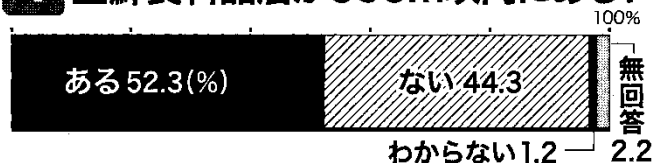
買い物で困っていることは、①特にない②場所が遠い③一度にたくさん買えない一の順。このうち「場所が遠い」と答えた人を市町別で比べると、南大隅町が一番多かった。

ほとんど毎日とっている食品から栄養状態を見てみると、所得が高くなるほどよかった。男女別では女性の方がいい。500m以内に生鮮食料品の店があるかないかでも差があった。

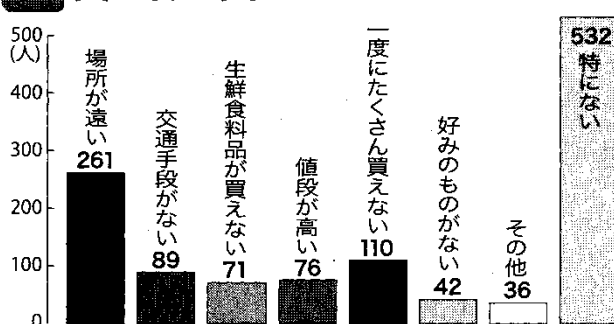
買
い
物



4 生鮮食料品店が500m以内にある?



5 買い物で困っていることは? (複数回答)

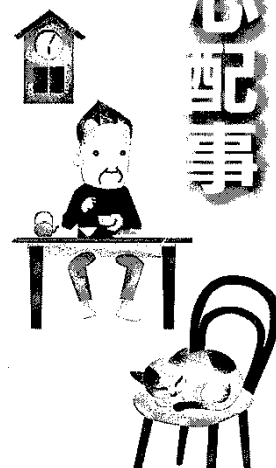


「ちょっとした」支援期待

「心配なこと」は「健康がすぐれなかつたり病気がちである」が204人で最多。「外出時の転倒や事故」「収入が少ない」と続いた。

「日頃してほしいこと」は「ちょっとした家の補修」に続き、「電球の取り換え」「ちょっとした家電の修理や配線の点検」「ちょっとした水道

心
配
事

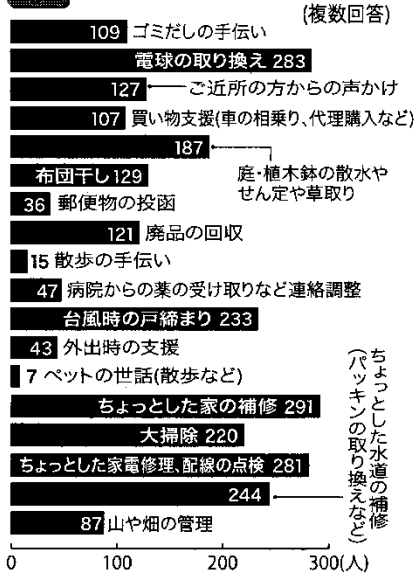


の補修」「台風時の戸締まり」だった。求められている支援は「ちょっとしたこと」が目立っている。

自由回答では「降灰除去」「主人の古着を処分したい」などがあつた。

緊急時のサービスについて、「自分で操作する通報システム」が最も多く、市町別では鹿児島市の4割以上が希望した。

15 日頃、何をしてほしい？



9 心配ごとは？



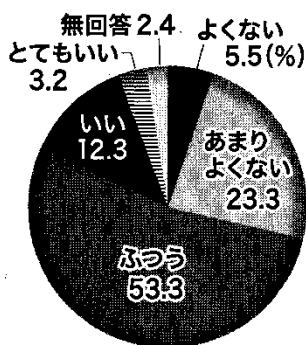
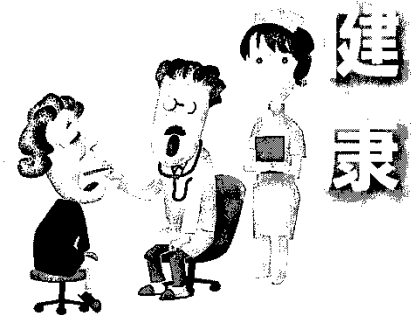
不安増すほど孤独感

健康状態は「よくない」「あまりよくない」合わせて28.8%。地域的な差はあまりない。ただ8割以上が通院している。

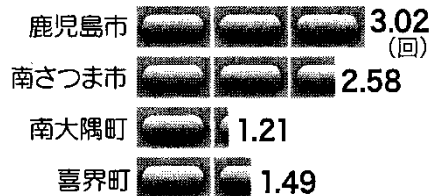
通院している人と、通院している回数とともに、医療機関が比較的多いとみられる都市部の方がやや多い。月平均の通院回数を比較すると、鹿児島市3.02回に対し、南大隅町は1.21回だった。

また、健康に不安を抱えている人ほど孤独感を感じていた。

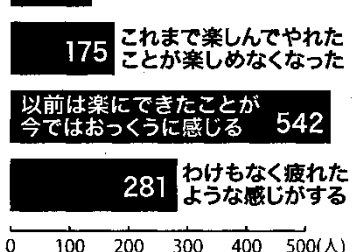
同様に、1人暮らしの満足度、近所づきあいの頻度でも、健康に不安を感じている人ほど、それらの割合は低い傾向がみられた。



2 通院は月に何回？



14 体調、気分は？



交流

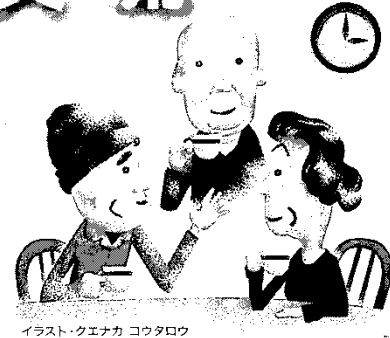
奉仕活動 男性が積極的

男女別では、ふれあいサロンやお達者クラブへの参加は女性が多い。ただ、男性は「これから参加してみたい」割合が多く、特に奉仕活動やボランティア活動に対しては男性の方が積極性を見せた。

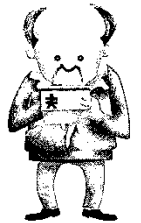
収入別では、収入が多くなるにつれて外出頻度が高くなり、交流範囲も広がる傾向がみられた。所得が高い方が買い物や余暇での外出が頻繁で、社会活動への参加率も高い傾向がみられた。

収入の少ない人は、孤独死を身近に感じやすい傾向があった。

経済的条件とは関係しなかったのは、健康状態、食事の回数、近所づきあい、別居家族との連絡、友人数などだった。



イラスト・クエナカ コウタロウ



16 交流していますか？(男女別)

ふれあい・いきいきサロン、お達者クラブ

	現在参加している	過去参加していた	今後参加してみたい	参加しないと思う	無回答
男	22.3(%)	9.8	242	363	74
女	39.5	12.1	125	281	78

100%

老人クラブ活動

男	27	13	205	316	79
女	37.7	13.2	87	304	10

ボランティア活動

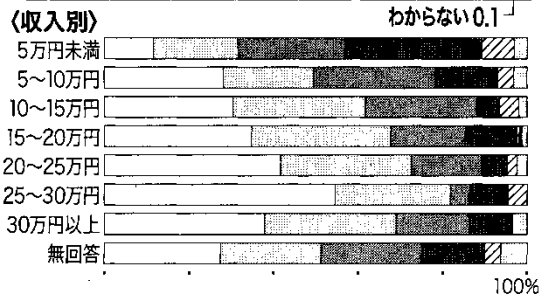
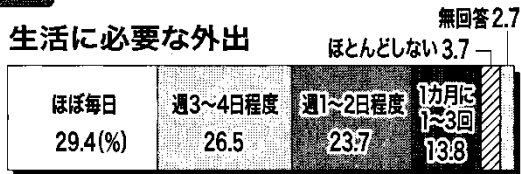
男	16.7	15.8	195	40	79
女	13.2	10.3	107	505	15.4

自由な交流の場

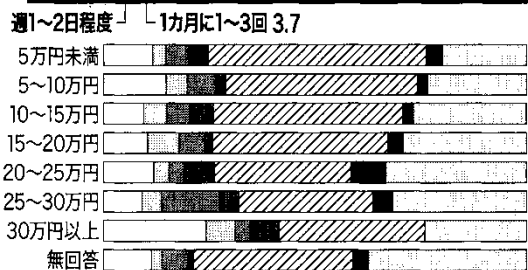
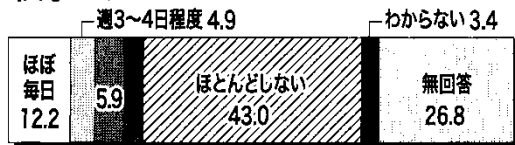
	行ったことがある	行ってみたい	行かないと思う	無回答
男	10.7	37.7	433	84
女	14.9	29.3	445	11.3

(小数第2位を4捨5入)

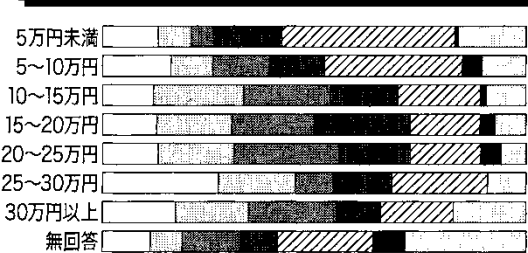
12 外出は？



仕事のため

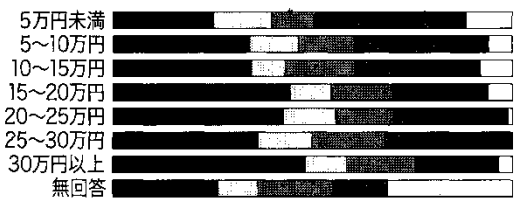
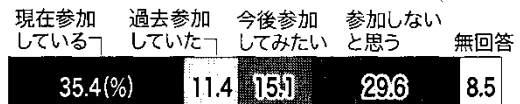


余暇のため

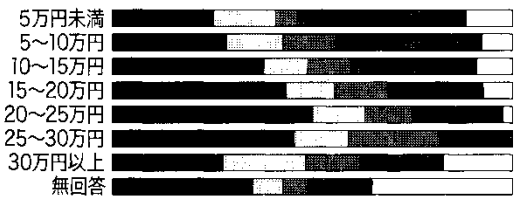


16 交流していますか？(収入別)

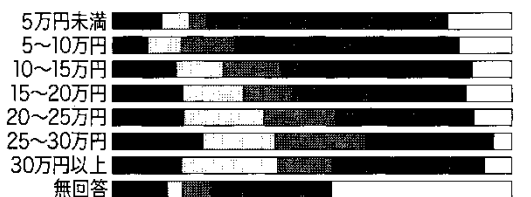
ふれあい・いきいきサロン、お達者クラブ



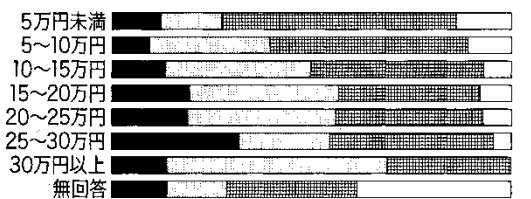
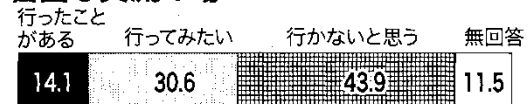
老人クラブ活動



ボランティア活動



自由な交流の場



鹿県1人暮らし高齢者調査 主な質問と回答

6 災害時(台風や地震)や火災などの緊急時に1人で避難できますか

- ① 1人で避難できる 66.0%
- ② 少し人の手助けがいる 22.6%
- ③ 大いに人の手助けがいる 8.5%
- 無回答 2.8%

7 6で「少し手助けがいる」「大いに手助けがいる」の方へ)手助けを頼める人はいますか

- ① いる 75.2%
- ② いない 20.0%
- 無回答 4.8%

1 1 交流の範囲についてお聞きします

① 近所・集落内の人との交流が主である	57.1%
② 集落を含め自治体内の人との交流が主である	11.8%
③ 自治体内の人との交流もあるが、他の自治体の人との交流もある	23.9%
④ 他の自治体の人たちとの交流が主である	2.5%
無回答	4.7%

1 7 一番近いお子さんとの別居状態について該当するものに○をつけてください

① (別居だが) 同一家屋である	3.0%
② (別居だが) 同一敷地内にいる	3.3%
③ 近隣地域にいる	20.3%
④ 同一市町村にいる	19.4%
⑤ その他地域(市外)にいる	35.8%
⑥ 子どもはいない	13.3%
無回答・その他	4.9%

1 8 暮らしの費用は次のうちのどの収入ですか(複数回答)

① 自分の勤労収入	52人
② 恩給・年金	894人
③ 生活保護	32人
④ 別居の家族の収入	9人
⑤ 利子・配当・財産収入	31人
⑥ その他の収入	27人
⑦ 預貯金を崩して使う	79人

1 9 収入は月平均税込みでいくらでしょうか

① 5万円未満	13.1%
② 5～10万円未満	28.6%
③ 10～15万円未満	20.2%
④ 15～20万円未満	16.5%
⑤ 20～25万円未満	8.4%
⑥ 25～30万円未満	2.2%
⑦ 30～35万円未満	1.7%
⑧ 35～40万円未満	0.5%
⑨ 40～45万円未満	0.1%
⑩ 45～50万円未満	0.6%
無回答	8.0%

孤立化の防止 男性がカギ

合同アンケート調査 高橋信行・鹿国際大教授に聞く

今回の合同調査で中心的な役割を担った鹿児島国際大学の高橋信行教授に、結果から見え
てきたことについて聞いた。

◇

まず男女で差が出たケースを述べたい。

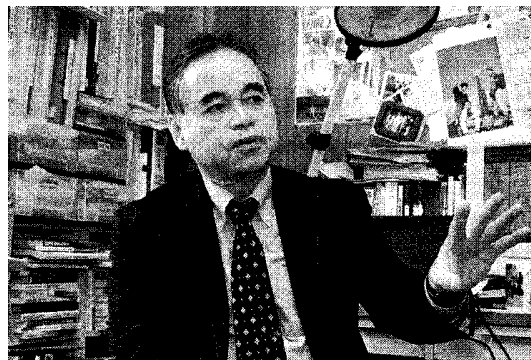
女性はいわゆるサロンの場へ積極的に出ていく。対して、男性はその傾向は低い。

だからといって、男性が全く引込み思案というわけではない。ボランティア活動をした
いと希望する男性は、女性よりも割合が多かった。

つまり、男性は茶飲みの集まりにはあまり関心を示さないが、集まりに大義名分があったり社会性を帯びていたりしていると、とたんに期待度が高まる。

また、人間関係は女性が集落単位が主なのに対し、男性は仕事をしてきた影響からか広域的である。

以上の点から、男性を社会的な活動を伴う集まりへうまく誘導できれば、孤立化を防ぐだけでなく、活動自体を活性化させる可能性があることが分かった。



次に経済的条件による違いである。

収入が少ないほど孤独死の意識は高くなる傾向があった。外出、交流活動への参加は所得が多い人ほど活発化しているようだ。

差がないのは健康状態、近所づきあい、会話、頼れる人数などである。所得の多寡と孤立化は、単純には比例していない。

ただ、交流活動への参加については差が出ているので、収入の低い層をどう社会へ促していくか、も課題だ。

南日本新聞の「読者からの便り」を読むと、夜になると孤独感を募らせる方が目に付いた。昼はさまざまな事業が提供されても、夜どうするか。これも考える必要がある。

今回の合同調査で、社会的孤立、経済的困難の問題が浮き彫りとなった。今後、さらに分析を進めたい。

ところで、この調査に先立ち鹿児島国際大学は、社会調査実習や演習を通して枕崎市で高齢夫婦世帯と1人暮らし世帯を、鹿児島市宇宿地区で高齢1人暮らし世帯を調査している。

その際痛感したのは、調査自体が非常に難しかったことだ。今回と異なり学生の訪問面接調査だったのだが、悪質な訪問販売や不審者防止キャンペーンのせいかわarning感はかなり強く、次々と断られた。

住民に警戒感だけを植え付けると、むしろ個人の孤立化を深め、社会の信頼感まで失っていく可能性をはらんでいる。

外からのアプローチを門前払いするばかりでなく、犯罪被害に遭わないようにしつつ、併せて社会といかに関わっていくか、を考えていくことが大切ではないか。

また今後、女性の社会進出に伴う問題も出てきそうだ。つまり単身仕事を続け地域と関わりの薄かった女性は、今の男性と同じように孤立化する可能性がある。男女共通の課題となってくるかもしれない。 (談)

平成24年(2012年)1月1日(元旦) / 南日本新聞 1面・24面・25面